



絵・佐藤勝昭 文・橋本 周



55

麻生区  
文化協  
会報

妙永山 善正寺

善正寺は、柿生駅より柿生小学校方面に10分程歩を進めると右手に善正寺の案内に出会う。緑に囲まれ、虫の音を心地よく聞きながら緩やかな坂道を上ると、半世紀程前にコンクリート造りとなった寺が豊かな自然とうまく融合している。境内には、荻原井泉水の「み仏」句碑、橋田東声の句碑や地元片平の農民歌人中山徳次の碑など、歌碑の寺として地元知られている。

さて、この寺は、宗派が日蓮宗、山号は妙永山、寺号を善正寺とし、永正元年（1504年）創設五百年からの由緒ある寺である。その由来は、御主 大熊修理佐善正日中尊儀は、夫婦共に日蓮聖人への多大なる信望を持ち、宗祖日蓮の説く「法華経」の影響を受け、功德の詰まる「お題目」の信仰のため、自らの領地を寄贈した。この寺の開山上人善学院日秀上人と共に建立する。山号は、大熊氏夫人の法号・妙永日昌より、寺号は大熊氏の法号・善正日中から名称をとったものである。

▼手を合わせたまふ仏へ手を合わす  
▼わが屍埋めし塚は掃かず置け

荻原井泉水

雑木落葉はあたたかきものを

中山 徳次

# 伝統文化と新しい文化の コラボレーションに期待

麻生区長 多田 昭彦

本年四月一日付けで麻生区長に  
着任いたしました。どうぞよろし  
くお願いいたします。

麻生区は昨年区制三〇周年を迎  
え、文化協会の皆様にも大変ご協  
力をいただき、多くの記念イベン  
トを盛会に開催することができま  
した。

この記念事業でのパネル討論会  
「麻生区の三〇年の歴史とこれか  
らを語る」の記録を拝見いたしま  
して、改めて麻生区の三〇年の歴  
史と、この間、麻生区のまちづく  
りに関係された皆様のご苦労や熱



い想いを伺うことができました。

分区当時、私は教育委員会にお  
りまして、開発などの影響による  
児童生徒の急増に備えた多くの区  
内小中学校の増築に携わってお  
りました。

## 緑豊かな風景の中に当時の面影が

着任後、区内を回って見ますと、  
街並みは大きく変わったものの、  
緑豊かな風景の中には今でも当時  
の面影が色濃く残っております。

麻生区は多摩丘陵の豊かな自然  
や歴史的な文化財・史跡も多く、  
新百合ヶ丘駅周辺には芸術文化の  
拠点施設などが集積され、また、  
幅広い芸術文化の分野で活躍され  
ている方々が多く在住されてお  
り、麻生区における文化の振興や  
向上に大きく貢献していただいで  
おります。

このような恵まれた環境の中  
で、麻生区文化祭、麻生音楽祭、  
KAWASAKIしんゆり映画祭、

アルテリツカしんゆり、あさお芸  
術のまちコンサート、kirara  
a@アートしんゆり、しんゆりオ  
リーブまつりなど、多彩な事業や  
イベントが区民の皆様の手によっ  
て展開されてまいりました。

また、区制三〇周年を記念して、  
区の花「やまゆり」、区の木「禅  
寺丸柿」も制定されました。

## 区民が愛着と誇りを持つ まちづくり

こうした多様な取り組みや資源  
を活かした芸術文化関連事業を通  
じて「芸術・文化のまち麻生」が  
より多くの皆様に浸透し、また実  
感いただくことにより、麻生区の  
活性化とともに、区民の皆様がよ  
り愛着と誇りをもてるまちづくり  
を進めてまいります。

さて、現在、川崎再生フロンテイ  
アプラン第四期実行計画の策定に  
取り組んでおります。

麻生区は市内緑地の42%が集中  
する緑豊かなまちであり、犯罪認  
知件数、交通事故、火災件数は市  
内で一番少ない安全・安心なまち  
です。

人口構成は〇〜四歳児は市平均  
より少なく、六五歳以上は市平均  
を上回っております。そして今後

も人口増加は続くのも予測されま  
す。

## 伝統文化と新しい文化の コラボレーションが課題

平成二六年〜二八年度に至る同  
計画では、麻生区の重点的な取り  
組みとして、引き続き芸術・文化  
のまちづくりの推進に取り組みと  
ともに、麻生区の農業資源や環境  
を活用した農と環境を活かしたま  
ちづくりの推進、地域防災力の向  
上に取り組みでまいりたいと考え  
ております。

また高齢化社会に備え、医療・  
福祉政策の充実とともに、これま  
で区内の事業者の皆様のご協力で  
より独自に取り組みでまいりまし  
た高齢者見守りネットワーク事業  
や、シニア世代の知識や経験をい  
かした地域活動への参加や活動の  
場の提供、生涯スポーツ活動を通  
じた健康づくりの推進など、地域  
資源を活かしたまちづくりと、高  
齢化社会を様々な面から支えるま  
ちづくりを進めて行くことが麻生  
区の課題と認識しております。

麻生区文化協会の皆様には引き  
続き、ご理解とご協力をお願いす  
ると共に、ご活躍を心からお祈り  
申し上げます。



郷土を愛し、郷土の歴史を発掘する

# 小島 一也さん

## ご先祖は郷土小島佐渡守

「麻生郷土歴史年表」を自費出版され、「柿生郷土史料館」の設立に努力された郷土史研究家で柿の実学園理事長の小島一也さんにお話を伺った。

小島さんは、昭和二年生まれの八六才。室町時代の郷土で常安寺の開基である小島佐渡守から数えて二代目ということだ。

## 小学校を卒業して玉川学園に

小島さんは義胤尋常高等小学校（現、柿生小学校）を卒業すると、玉川学園中等科へ入学する。ここで、玉川学園の創始者である小原國芳先生に出会い、「玉川学園では、大将や大臣は育てない、人間を育てる。」という教育方針に、その後

の人生を左右するほどの大きな感化を受ける。「私は、いわば小原先生に洗脳されたのです」と笑う。

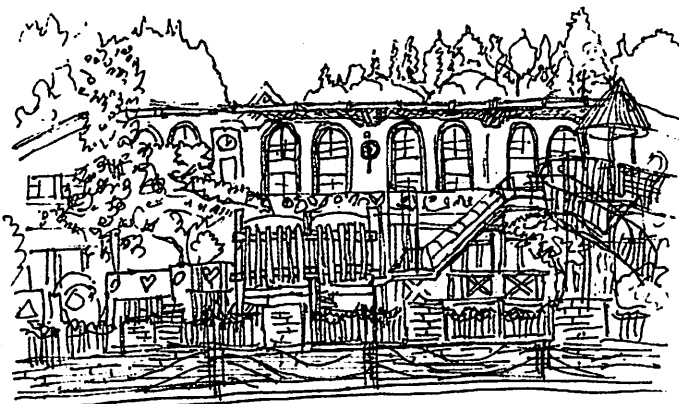
## 玉川大学の第一期生に

中学卒業後、家業の農業に従事するが、ある日、たまたま乗った小田急線の車内で、小原先生に遭遇した縁で、玉川大学農学部第一期生となる。大学の入口には、石碑があつて「人生の最も苦しい、いやな、辛い、損な場面を、真先に微笑をもつて担当せよ、くによし」と刻まれており、小島さんはこれを努力目標としていたという。しか

し、「八〇年経つてもなかなかこのとおりにできません。」と嘆息する。その恩師から、玉川大学の牧場を手伝わないかと誘われるが、断つて中退する。

## 柿の実幼稚園を設立

小島さんは、その後、青年団の団長として活躍し、神奈川県教育



Kaminomi Kindergarten

柿の実幼稚園

KATSUMI

委員会から、社会教育功労賞を受ける。

その頃、柿生には幼稚園がなく、地元には設立への強い要望があつた。幼児教育の重要性を感じた小島さん、先祖から受け継いだ土地を使って、自然環境に恵まれた柿の実幼稚園を設立する。ここにも小原先生の精神が活かされた。幼稚園の機関誌「柿の実通信」に寄せた巻頭言をまとめた「柿の実百話」、そこには、小島さんの子どもに対する温かいまなざしが溢れている。

「柿の実百話」のはしがきで、現園長の小島澄人さんは、「小島一也理事長は二十歳の頃に作った人生訓『今黙さねば』の実践を現実のものにした」と書く。

その後、地域の方々に担がれて、昭和五八年から四期にわたり市議会議員として活動、平成七年には市議会議長となる。権力者となることをよしとせず、「仏の議長」と呼ばれた。

小島さんは「幼稚園を設立した四十から五十才のころが、私の人生で最も充実した時期でしたな。」と述懐する。

## 麻生観光協会の発足

平成一三年、麻生観光協会が発足、会長となる。他区には、川崎大師、多摩川梨など観光の目玉がある。麻生の観光は、そういう従来型の観光を目指すのではなく、地域を再発見し、郷土愛を育てるようなものでなければならぬといふ小島さんは主張する。

「この地で生まれ育った子どもたちにとって麻生はふるさとなのです。百合丘三丁目に見晴しの丘があります。そこに立つと、遠く丹沢の山、富士山、そして昔の橘樹郡、都筑郡の地が一望に見渡せます。マンションが建ったり住宅地ができたりの変化はあるけれど、地形は太古から変わっていないのです。この不易なものを次の世代に伝え、町おこしに貢献するのが観光なのです。」と熱っぽく語る。

発足後、最初に実施したのは、麻生川の桜まつり、そして菊花展。その後、行政に協力して、麻生観光マップも作った。

## 麻生郷土歴史年表

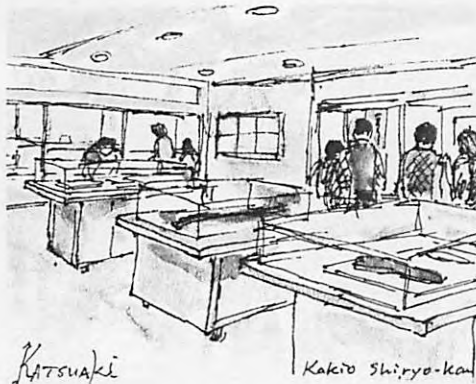
小島さんは、市議会議員の頃から、麻生に起きたことを細かく記録として残してきた。これを一冊の本にまとめて自費出版したのが、冒頭にも紹介した「麻生郷土歴史年表」である。



旧柿生村でパラステゴドン象が生息していた氷河期から二〇〇九年までをつづった三六八ページの大作。専門の郷土史家も驚くほどの力作で、図書館や歴史好きの住民から引つ張りだこだ。年表に添えて、地域の出来事や国内外の出来事も記述され、日本史と世界史がひと目でわかる。また、見開きページの左端にはコラム欄も設けられている。膨大な資料をよく一人で集め、本として出版したものだと、驚くばかりだ。小島さんは、「お世話になった地域への恩返しです。」とあくまで謙虚だ。

## 柿生郷土史料館

地域の歴史に興味を持ったきっかけは、柿生小学校のPTA会長だった一九六〇年代の後半、小学校の先生が旧柿生村の郷土史づくりをされたが、これを手伝ったのがきっかけだという。柿生小学校が片平に移り、もとの小学校の跡地に柿生中学校ができる。柿生中学校の改築に当たって、特別教室を整備して郷土の史料を集展示しようという機運がたかまり、史料館設立委員会が発足、小島さんが委員長となる。各町会、町会長に賛同の署名をもらって、教育委員会に持っていく、史料館



柿生郷土史料館

にする許可をもらった。

整備には同窓会の協力で集めた募金の一部を使った。内部には、講義室・展示室に加え、床の間のついた和室がある。「このような温かい雰囲気のある史料館は、公のお金ではできないが、民の力を加えることによってできたのです」と語る。史料館では、元柿生中学校長をはじめ郷土愛に燃えたかたがたが、運営委員会を作り、純然たる歴史のセミナーを開催している。これまでに開いたセミナーは四二回にもなるという。この中から育ったボランティア数名を加え、二〇人以上が活動している。町田市からも勉強に来る。こういう活動を通じて、ここを観光の拠点にしたいという。

史料館は、「柿生文化」という広報誌を出している。小島さんは、この広報誌にコラムを連載しており、これまで三三話となった。一〇〇話になったら、本にして出版したいと、意欲的である。小島さんは、今も、畑に出て農作業をするほどお元気なので、一〇〇話といわずコラムが続くことを願ってやまない。

(絵と文 佐藤勝昭)

# 夏休み親子教室

菅野 明

「夏休み親子教室」という名称で小学生を対象にした講座を開くことになったのは、平成十五年度からです。それ以前にも「親子で楽しむ伝統文化」としての催しが企画されていきました。そのころの教室には、お茶をたてる、お花を生ける、日本舞踊を踊る、子ども五七五がありました。そのままた夏休み親子教室に移行し継続されてきました。

加えて、地域を知る、粘土でつくる、毛筆で自分の名前を書く、墨で絵を描く、和太鼓、絵手紙、洋舞、お手玉、夾纈染め、マイうちわなどの講座が開かれてきました。

十九年度の神奈川科学アカデミーの藤嶋昭先生による、光触媒の不思議、二十年年度の藤間照子先生による、自然を計ってみよう、二十四年度から佐藤勝昭先



ソーラーカーを作って遊ぼう



音の世界に飛び出そう



麻生区ってどんな街

生による、ソーラーカーを作った遊ぼう(太陽光エネルギー)とといった新しい科学の分野に触れる講座も組んできました。親と子が科学へのおもいを膨らませますよ機会になったと思います。

今年度の親子教室では、区内の大学へ働きかけて「若い力」の導入を試みました。「和光大学かわ道楽」のみなさんによる、鶴見川の生き物、「昭和音楽大学」の音の世界に飛び出そうという講座ができて、その趣旨に添えていただきました。今後の展開が期待されるどころです。

夏休み親子教室は、なお募集の在り方や日程の組み方などに考えたいところもありますが、今年も多勢の子どもたちが応募してきて

います。そして、目を輝かせて臨んでいます。応えるべく協会としてはいつそう心していきたい事業だと思えます。今年度は十八教室も開催できましたが、講師を受けてくださる方は永年携わってこられた方が多く、本当に感謝いたします。子どもたちが先生方の文化芸術に関しての優れた見識とその芸と技に直に触れることは、きっと、その場限りで終わらない何か刺激するものが残るでしょう。そして、憧憬の念を抱き、今この麻生にある文化芸術の力にも、もつと目を向けていく、そういう繋がりになっていくらと思えます。



鶴見川の生き物

# 麻生区のルーツを訪ねて パートⅡ

文・写真 小田島 紀美

三月九日(土曜日)朝八時十分新百合ヶ丘アートセンター前から二十四人を乗せたバスが出発した。乗車時に配られたおやつを手に、「遠足に行くみたい!」という和いだ参加者の声もあがった。

雑学教室は、麻生区制三十周年記念事業として文化サロン主催で昨年に続き「麻生のルーツを訪ねて パートⅡ 橋樹郡の夜明け」をバスツアーとして開催した。

同行して下さる講師は川崎市教育委員会文化財課の服部隆博氏と川崎郷土研究会の對馬醇一氏であった。服部氏には、見学地での案内と解説を、對馬氏には市内を通る街道についてバスの中からの解説をお願いした。

見学ルートは、細山郷土資料館―影向寺―橋樹郡衙推定地―市民ミュージアム―円筒分水の順である。

①細山郷土資料館  
現在は館内改修のため休館中にもかかわらず資料館運営委員の方々が迎えて下さり、山田士筆氏、資料

館館長の岡本氏も解説に加わっていただいた。

西生田小学校の帰り道で化石を拾い集めた話、貴重な埋蔵物は国立博物館に収納されているという話、川崎が工業都市として栄えたルーツともいえる細王太吉である話…等。

郷土の先人たちの偉大な姿を貴重な展示物と分かりやすい解説によって想像できた。次の予定もあり心残りな思いで細山資料館を後にした。

## ②影向寺(かげむかし)

南関東屈指の古刹である。住職のご厚意により薬師堂や宝物館を拝観することができた。国重要文化財の薬師如来両脇侍像、川崎市重要歴史



石に用いられた影向寺の基礎の塔  
参加者も聞かせる伝言の塔

記念物の木造二天立像など国宝にも匹敵する宝が川崎にも存在することに感銘を受けた。服部氏の案内で次の橋樹郡衙推定地に徒歩で向かった。

## ③橋樹郡衙(たけはなぐんが) 推定地

高津区千年の住宅街の中に古代橋樹郡の役所跡(郡衙)の一部が宅地開発で見つかったのが、平成八年。その後川崎市教育委員会が調査し、建物跡が広く分布していることが判明。現在は、千年伊勢山台遺跡として公園になっている。

この地に七世紀から八世紀に三十以上の正倉(倉庫)の建物があったことが調べられているが、まだまだ謎が多く、ますます古代へのロマンが膨らんだ。

バスの中では對馬氏から津久井道、大山街道、中原街道や地名などにまつわる話が興味をひいた。

川崎住民として、頻繁に利用している道路について、古代から江戸時代に及ぶ長い歴史と人々のくらしを思い描くことができた。

## ④市民ミュージアム

昼食後、学芸員の方から博物館の川崎の歴史を中心にした展示物の解説を伺った。今回のツアーを振り返るようで、大変分かりやすかった。またまた開催中だった中原区出身

の世界的人形作家、与 勇輝氏の展覧会を鑑賞することができたことも幸いだった。

## ⑤円筒分水

名ドライバーのおかげでバスは狭い道を辿り、久地にある円筒分水を車窓から見学した。ミュージアムで模型を実際に見ていたので国登録有形文化財としての価値がよく理解できた。



橋樹郡衙推定地にて



保存されている久地円筒分水

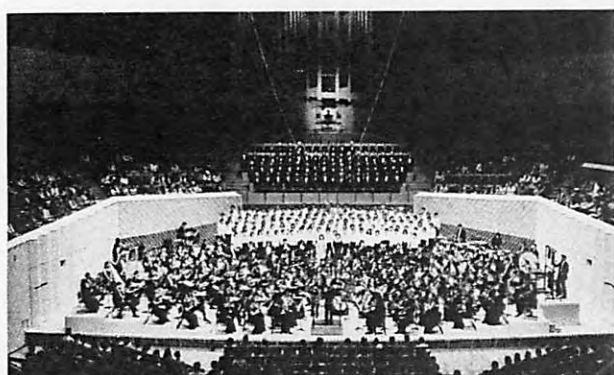
今回、貴重な資料を用意して下さったお二人の講師に心から感謝したい。

## 参加者の感想から

- ◇講師の先生方のお話が大変参考になり、密度の濃い日程で勉強になった。
- ◇川崎に住んで歴史まで考えるゆとりがなかったが、今回参加してとてもよかった。◇参加人数が適当であった。
- ◇バスでの移動は楽でよかった。
- ◇このような企画は準備が大変だと思いが、今後も続けて欲しい。等々

## 「麻生フィルハーモニー管弦楽団」30周年を迎えて

麻生フィルハーモニー管弦楽団 団長 横須賀 朝子



麻生フィルハーモニー管弦楽団は今年、創立30年になりました。

麻生区が多摩区から分区し、新百合ヶ丘駅前にホール(現 麻生文化センター)建設の予定という情報がきっかけとなり、昭和56年頃から始まった地元の音楽家、音楽愛好家などによる「望ましいホール」を検

討する会合で「地域に根ざしたアマチュアオーケストラを作ろう!」という機運がたかまり、58年3月1日付け「マイタウン」紙で募集したところ、150人位の呼応があり、昭和58年(1983年)4月に結団式の運びとなりました。

その後、春と秋の定期演奏会、麻生音楽祭におけるファミリコンサート等積極的に演奏活動を行い、平成8年(1996年)には麻生区文化協会の推薦により「川崎市文化賞」をいただきました。平成11年(1999年)からは年末恒例の「かわさき市民第九コンサート」、平成16年(2004年)からは川崎駅西口に出来た「ニューザ川崎シンフォニーホール」での「ニューザ川崎市民交響楽祭」にも参加、「しんゆり・芸術のまち」「音楽のまち・かわさき」を盛り上げる役割の一端を担うようになりました。

今年4月28日には、改修されたばかりのニューザ川崎シンフォニーホールで「創立30周年記念コンサート

I」を開催することができました。この演奏会には麻生区合唱連盟の応援を得て、マラー作曲交響曲第2番「復活」を演奏しました。この曲は200名以上の合唱とソプラノ、アルト2名のソリストと100人以上のオーケストラが演奏する大規模な曲でした。

予定していた指揮者が本番直前に急病となるアクシデントがありましたが、指揮者の弟子である広上淳一氏の素晴らしい指揮のもと大変盛り上がる演奏ができたこと、関係者の皆様のおかげと感謝いたします。

11月3日には、麻生区文化祭のなかで「創立記念コンサートII」として30年前の披露演奏会で演奏したドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界」とこれからへのチャレンジとして、リヒャルト・シュトラウス作曲交響詩「英雄の生涯」を地元在住の横島勝人氏の指揮で演奏します。

「川崎市文化賞」を受賞した時に当時の団長さんの挨拶は「皆様に関心を持っていただけたオーケストラになった。次は皆さんに『感動』していただけるオーケストラを目指したい」でした。この目標をこれからも持ち続けたいと思っています。

## 編集後記

▼今夏も異常気象から猛暑列島は続き、熱中症に要注意!集中豪雨、予期せぬ災害に家屋財産、尊い人命迄も一瞬にして失う。自然の怖さと被災地の皆さんの困惑、困窮された状況は察するに余りあり辛く心痛む日々にも無力感が募ります。

▼麻生文化協会は、来年度、創立30周年を迎えます。そこで、記念事業実行委員会が発足しました。会員の皆さんが総力を結集して、麻生区らしい記念事業の取り組みが期待されます。

▼今年度から会誌「からむし」の企画・編集には、各部会の代表者に加わって頂いております。(橋本周記)

麻生区文化協会会報  
からむし 第五十五号  
平成二十五年九月三十日発行  
発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子  
編集 麻生区文化協会 広報部  
川崎市麻生区万福寺一五二  
麻生文化センター内

☎ 〇四四一九五一―三〇〇  
印刷 (株) エリアブレイン